

田舎には大地主が山ほど金を持つてゐる、銀行を持つてゐる。都會には大商館、大會社といふ大資本家がゐる、この双方から米の買占めをやる賣り惜みをやるからだ。金があればどんな買占賣惜みも出来る、米價が天井知らすと云はれるのは、米價を上下する彼奴等大地主大資本家の金が、天井知らずに存在すると云ふことだ。この金持共の大番頭が、政府にあり小番頭が議院にある。そして米價調節と来る、何をふさげやがるんだい。米價を調節する唯一可能策は、米價を吊り上げる此奴共の大資本を國有に召上げることの斷行あるのみだ。無い袖は振られぬとは、經濟學でも政治學でも一貫した

原則だ。悪用する金が買手にも買手にも無ければ、米價は調節するなと云つても調節される。國民の咽喉首に巻きついてゐる繩を兩方から引張つて、死んでは臺なしたから引張り方を調節してやれと云ふ鬼の空涙だ。恐ろしい世の中さ。空涙の鬼共が本大臣は……と言つたり議長何番と怒鳴つたり、我々の論ずる所によればとホザくんだ。社會主義の決行が米問題、米價問題と云ふ三度々の切迫となつた今日だ。五六十年前のマルクス時代の講釋でもなければ、赤門のヘナチヨコ共にのさばらして置く時でもない。食卓に坐つて、飯椀に二本の箸をつきさして、さて可愛い妻子や御袋の顔を眺めて考